

水のある風景

松井 とし

今年もまた水の季節がめぐってきた。幼稚園の生活もこの時期は、水が遊びの中心にすえられる。園庭に小さな水槽を置き、スプリンクラーを回すだけのまことに、ささやかな環境だが、水着に着替え、水とたわむれる子どもたちの喚声が夏の空高くこだまする。

しばらくすると、あちこちに水たまりが出来る。すると、だれからともなく泥んこ遊びが始まる。しゃがみこんで両手の平で水と土をなでまわす。泥水を集めてコーヒーを売り始める。果ては泥の中に身体を横たえドロ人間に変身する。みんな生き生きとのびやかな顔つきである。

「せんせーやわらかくてきもちいいよ」「おっぱいみたい」等と言いなから、ひたすら泥の感触にひたっているのを見てみると、慌しく物質偏重の、ぎすぎ

すした現代社会を生きている子ども等の安らぎの原点を見る思いがする。温かく、無条件に受け入れてくれる泥の感触は、直感的に懐かしい母の胸を思いださせたのであろうか。

H男は自閉的な傾向をもつ子どもでもある。彼は一年中、水とよく遊んだ。真冬の寒い日も手を真っ赤にし、洋服をぬらし、外の水道の蛇口の下にバケツを置き、両手で渦巻きを作り続けていた。

どの子どもも水が大好きである。しかし、大人の意識は水遊びを止めさせる方向に反応する。「洋服が濡れる、風邪をひく。」「今に水がでなくなってしまう。」「等傍らでなんと言おうと純粹に水を求め続けるH男は、すべての子どもの心を表しているように思えた。

水は刻々と姿を変える。手で作った渦巻きもすぐに消える。子どもにとっては形になりにくい流動性、不確かさに意味があるのだろう。一方、大人は無意識のうち形あるものに価値を見出そうとするのではないだろうか。高速シャッターで動きを止められた水の写真や、ダイナミックな滝の流れを全体として鑑賞して感動したりする。

(神奈川県立教育センター)